
僕と都市伝説

北斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と都市伝説

【Nコード】

N6999X

【作者名】

北斗

【あらすじ】

学校で起きる、様々な怪事件を4名の学生中心に登場人物全ての視点からみたホラー作品です。

僕と都市伝説 1（前書き）

少し残酷な表現や、卑猥な表現が含まれておりますご注意ください。

僕と都市伝説 1

「そうそう、ねえ苗木！聞いた！？」

放課後の人の居なくなつた教室に
すき透る声が響く。

東島 美智代は、
急に、立ち上がると。
机から身を乗り出て
前席に座っていた、
白瑞 苗木に言った。

「え！何を？」

苗木は、読みかけの本を閉じると
美智代の方を、振り向いた。

「ああ、今話題のあれだろ？」

美智代の、隣の席で携帯をいじっていた
高野 和之は、
二人を、横目でチラッと見て言った。

「さすが和君、情報が早い！」。

「早いも何も、今朝からその話題で
校内もちきりだろ」

外では、運動部が練習をしており
気合の入った掛け声が、
ここまで、聞こえてくる。

二人の話を、まだ理解してないらしく
苗木は、キョトンとしていた。

「二校の話だよ!」。

和之の二校と言う言葉で、やっと気づいた苗木は
「ああ」と、
言うように、頷いた。

「そう、なんでも昨日・・・
いや、今日の朝発見されたので、3人目らしいよ」

美智代は、腕を組み言う。

「3人目・・・」

苗木は、少し嫌な顔をし俯く。

美智代達が通う、一校から
電車で2つ先の駅を降りた所にある
二校で、今週に入りもう三回も
生徒による、飛び降り自殺が多発していた。

最初は、月曜日の朝、
出勤してきた二校の先生が、
校門をすぎてすぐの、正面入口横にある花壇の上に、

女子生徒の遺体を発見した。

二回目は、水曜日の昼

丁度生徒達が、お昼休みでの時間帯で多くの生徒が昼食をとっている時に起こる。

その日は良く晴れており、

中庭は、昼食をとっている生徒で賑わっていた、

職員室は、中庭のすぐ前にあり

わいわいと、生徒達の楽しそうな声が聞こえてきている。

しかし、昼休みが始まって丁度10分ほど経った時だった、まるで、大きな石か何かが、落ちて来た音がすると、

一瞬中庭から聞こえてきていた、賑やかな声ピタリと止みとてつもない、悲鳴が校内を包んでいった。

悲鳴を聞きつけ、先生方が中庭に駆けつけると、

そこには、泣き出している生徒や、

吐いている生徒でこった返している。

生徒達を掻き分けて行くと

原因はすぐに判明した。

中庭の端に、女子生徒の遺体があった

飛び降りた生徒の遺体は、頭が陥没していてとても、見られない状態だった。

「今回は、今日の朝6時頃

また最初と同じ昇降口で、見つかったみたいだぞ」。

「警察は、何ていつてるんですか？」。

苗木は、和之を見て聞いた。

「さあ？」和之は携帯をパチンと勢い良く閉じると、

「ニュースでは自殺した生徒達の間で、

何かトラブルとかなかったとか、調べてるって言ってたかどな」と、無愛想に言った。

「そうなんだ・・・」

苗木は、そう言うとき

考え込むように、窓を開けて

夕暮れ色に染まった校庭を見下ろしす。

校庭では、たぶんサッカー部であろう生徒が

顧問先生の「はい次！」と、言う合図とともに
ダッシュをしていた。

「トラブル？・・・そんなじゃないわ！」

力強い声に、苗木が振り返ると、

さつきから、黙って聞いていた美智代が

いつの間にか立ち上がりつており

苗木を真っ直ぐに見つめた目は

怖いくらいに輝かしていた。

「私が思つに自殺の原因は！」

「まで美智代！お前が言いたいことは分かる」。

美智代の話しに
和之が割り込んむ。

「霊の仕業と言いたいんだな？」と
呆れたように言った。

美智代は、「そのとうり」と
言うように、和之を指差す。

「ゆ、幽霊ですか？……」。

窓を閉めていた苗木が、幽霊という言葉に
手を止め、少し怯えた様子をした。

「だって、この一週間に同じ高校で自殺が3回だよ、
しかも、すべて飛び降り！」。

「で、でも、まだ幽霊だと決め付けるのは……」。

幽霊や霊現象が、すごく嫌いというか
正直苦手だった苗木は、青い顔をして
また俯いてしまった。

「あー！もう、苗木は相変わらず怖がりだなあ」。

「だって……」と、言うように、
苗木は美智代から目をそらす。

「そんなことじゃ、将来有望な巫女さんになれないぞ！」

苗木は神社の一人娘だった、
今いる高校を卒業したら

家の神社を手伝い

巫女やる事が、決まっている。

美代子と苗木は、家が隣どうしで
幼い頃から、美代子のオカルト好きに
苗木は度々、つき合わされていた。

今年になって、2年生に上がると
和之が、この学校に転校して来る。

和之は、美智代と同じくらいオカルト好きで
二人はすぐに仲良くなった、
今では、いつも三人でいることが多い。

美智代と和之は、まったく靈感などはないが、
苗木だけは、神主の血を引いているだけあり
美智代に心霊スポットなどに連れて行かれるたびに、
霊的な者を見たりしていた。

「霊の仕業かどうかは、後にして
こうたて続きに自殺が起きてるのは、確かに変だけだな」。

「うん……」。

「まあ！たぶん良くある話、最初に自殺した生徒が
苛めか何かされていて、その生徒を苛めていた生徒が

まさか、自殺するとは思っていなかったからそれで、ショックのあまり同じように自殺をしだしたって感じじゃないか……。

こう言う事件はそんな感じに終わるからな」。

和之が、ヤダヤダと言う様に重くため息をつく。

「うん、幽霊も嫌だけど……でも、何かそれはそれで嫌だなあ」。

和之が言ったように、こういう学校などで起きた事件と言うのは、生徒が軽い気持ちで起こす、友達どうしのはぶきあいや苛めなどが原因で起こるけえが多い。

特に最近では、喧嘩などをし怪我をしたりするとすぐに、親や先生などが出てきて、ひどい場合だと、裁判沙汰や慰謝料を請求をすることが多々ある。

そのせいか、まともな喧嘩をしたことが無い子供が多く限度を知らない、それと同様に、今時の学生による苛めはたちのものが多くなって来ている。

苛めを受けた生徒は、学校が怖くなり不登校になると同時に、人との付き合いを拒絶し家から出なくなる、いわゆる「引きこもり」になりやすい、最終的には、鬱などの精神病になり最悪、今回のような結果を引きを越したりする。

「そう思うと、俺は幽霊より人間の方が怖いよ」

和之は、苦笑いをして言った。

苗木と和之が、話していると

机が壊れるんじゃないかというくらい強く

バンツ！と、美智代が机を叩く。

「ちょっと、あんた達！その夢もオカルトも無い寂しい自論で、こんな貴重な霊現象を何まじめようとしているの！」

「あの・・・美智代ちゃん、

一様人が亡くなってるんだから、

貴重なっていう発言はちょっと・・・」

このところ、美智代は全然霊現象など不思議な事にめぐり合えず、かなり苛立っていた。

「別に、私だって人が死んで喜んでいる分けじゃないよ」

美智代はそう言ったが、

苗木と和之の目に映る美智代は、喜んでいるようにしか見えなかった。

「ただ、もしもだよ

今回の二校での連続自殺が、悪霊か何かの仕業だったならこれからも、死人が出るかもしれないじゃない！」

美智代は、黒板の前まで行くき

二人を説教するように話しをする。

「んで！」

そう自身満々に話をしている、

美智代の前に、和之は椅子を持ってき、

背凭れを前にすると、その上に腕を乗せるようにして座った。

「二校に、塩でも撒きに行くか？」

和之は、振り返り「なあ！」と、言うように苗木を見る。

鞆に教科書などを詰め、帰る仕度をしながら話を聞いていた苗木は、一旦手を止めそれはちよつと、いうように笑った。

和之は、美千代がどうしたいのか分かっていた、どうせ何時ものように、霊が見える苗木を

「このままじゃ一般人が危険」などと言う理由で無理やりに現場に連れて行き、

霊が居るいないで、楽しみたいだけなのだろうと。

「当たらずも遠からずね！」

今回は、もう三人も死人が出てるんだから

私達が、塩を撒くくらいじゃどうしようもないと思うの……。そこでえ！」。

美智代が、苗木を見る。

「もしも、何かヤバイ者が居たら

苗木のお父さんに、除霊をしてもらうの！」

「え~~~~~!!!!!!」

苗木は、思いもしなかった、

美智代の言葉に、悲鳴のような声を上げた。

「何？除霊が嫌なら、常霊でもいいわよ！」

「いや、そう言う事じゃないだろう……」

すかさず、和之がツツコミを入れる。

「で、でもお父さん忙しいと思うし……」

「え！？だっていつも私が、苗木の家に行くとおじさん縁側でお茶飲んでるじゃない」

「とても、忙しそうには見え無いよ」と、美智代は渋い顔をする。

そう言われると、確かにお盆とか以外は美智代の言うとおりなので、苗木はそれ以上何も言えなかった。

「よし決まり！それじゃあ早速行くわよ！」

「ええ！今から行くのかあ！？」

和之は立ち上がり、黒板の上に掛けてある

時計に目をやる。

時間は、まだ4時半を少し回った頃で、
丁度今は7月な事もあり、外はまだ明るかったが
何か、和之は気乗りしなかった。

こんな感じに、急に美智代に連れ出される事は度々あったが
今回に限り（虫の知らせ）と言うか、嫌な感じがしていたからだ。

「有言実行！さあ行くわよ！！」

美千代は、嫌がる二人の腕を無理やりに引っ張り
教室を出ていく。

三人が、下駄箱に着いた頃には
和之と苗木は、「もう行くしかないか」と
諦めていた。

出入り口から外に出にできると
空は、もう夕暮れで
夏には少しまだ早い
がすでに、蝉が鳴きだしていた。

校門付近には、部活を終えた
沢山の生徒達が溜まっており
「これから、何処か寄っていかない？」
などと、楽しそうに寄り道の予定を立てている。

「あ……」。

校門を、抜けるときだった「あれ？」

美智代が、急に立ち止まり、
今出てきた、学校の屋上を指さし言った。

「何？どうかしたか？」。

「だから、あそこ！！」

苗木と和之は、言われるままに
美智代が指さした方を向く。

そこには、制服からして男子だろう生徒が一人
屋上のフェンスに手を掛け下を向いていた。

「まさかなあ・・・」

和之が苦笑いをする。

「だけど、二校で
最近あんなことが起きてるから、もしかしたら・・・」。

ちよつと強張った苗木のその言葉に、
三人は顔を見合せると、早足に学校の中へと戻っていった。

僕と都市伝説 1（後書き）

かなり長編になると思いますので、よろしく願います。

僕と都市伝説 2

夕暮れに染まる屋上で、一人何かを探すように町の方を眺めている。

振り返ると、今さっきまで話をしていたはずのその者は、いつの間にか消えるように、居なくなっていた。

（これで、また一人か）と、思いそう思う、自分が現実でどのような顔をしているか想像すると自然と心のなかでは笑ってしまう。

ヒューっと、顔を撫でるように透りすぎて行く風が夏の香り運んでくると、

板東後記はそれを少し、心地良く感じていた。

屋上から校門を見降ろした目が、キツときつくなるのが分かった。掴んだフェンスを、後記は強く握った。

校門から聞こえてくる、在校生達の楽しそうな声が、後記には、風の心地よさとは裏腹に今は、うるさく感じてしかたなかったからだ。

もしも、今ここで自分があの生徒達の前に、ここから飛び降りたらどうゆう行動を取るだろうかだろうか？。

泣くのか、壊れたように笑い出すのか

それとも、あまりの自分の行動に皆声も出せなくなるだろうか。

後記は、それを想像すると
薄っすらと笑みを浮かべた。

無論、本気で飛び降りようとしている訳ではない。
ただ……

どうにかして、下でペチャクチャと絶えない喋り声を
一瞬だけでも、黙らせてやりたかっただけだ。

別に、黙らせるだけなのならば
命まで無駄にし飛び降りるよりも、
ただ下まで、降りて行き怒鳴ってやればいい。
そうすれば少しは静かになるだろう。

しかし、後記はそれをしたくなかった
いやむしろ、この学校で、
はみ出し者の自分には出来なかった。

別に、怒鳴って喧嘩やいざこざが起こるのが怖い訳ではない。

後記はとっては、人どうしの争いよりも
自分が毎日のように、見るものの方が
余程怖かったからだ。

何時頃からだっただろうか？
こんなにも他人が付き合うのが
嫌いになったのは。

後記は校門を、もう一度見下ろすと、

その答えはすぐに出た。

空中に、投げ出された体は、
猛スピードで落下していく。

その時、見た風景は今でもはっきりと覚えていた。

天と地が真逆になり、

自分が落下している時

今何を見たのか理解した頃には

もう、違う風景が広がっているのを。

地面に、叩き着けられるまでは

その繰り返しだったような気がする。

脳裏に焼きついた、その時の記憶は、

思い出すたびに、後記の胸を酷く締め付けた。

（大丈夫！）。

急激に高鳴出した胸に

ギュッと手を押し当て、

後記は、自分に言い聞かせた。

「・・・ふう〜」

後記は、深く深呼吸をし。

「そろそろ行くかな」と

振り替えた。

その時だった。

ドス！

鈍い音と共に
体に衝撃が走る。

誰かが、思いっきり
自分に体当たりをしてきたのだ。

不意に体当たりをされた
後記の体は、そのまま後ろへ
座るようにして倒れ込んだ。

「痛ったあゝゝ！」

後記は、いったい何が起きたのか
理解出来なかった。

ただ、ぶつかられた時、
一瞬だけだったが、
自分に飛び掛かってくる
女の子の姿が見えた。

「ふうゝ・・・間一髪！」

後記の上に、またがっていた
髪の長い女子生徒は、
スッと立ち上がると、
後記を睨みつけて言った。

そうそう・・・こいつだ。

そう思い、

後記も、コンクリートの

屋上に座り込んだまま

女子を睨みかえす。

「ちよつ、ちよつと美智代、いきなり何してるのよ・・・」

その、女子生徒の後を追うように

もう一人、小柄な女の子と、

いかにも、ひ弱そうで、教室では目立たない存在のような男子生徒が。

小走りにやってた。

「大丈夫ですか？」

小柄な女子が、後記に手を差し出す。

「あれ？確かあなたは、うちのクラスのえ〜つと・・・板東くんだよね？」

小柄な女子は、後記を見て言った。

そつだ、今手を差し伸べてくれた女子は

同じクラスの、委員長をしている

白瑞苗木だ。

後から来た男子は、

確か今年転校して来た高野和之。

坂東後記は、ほとんど学校には来ていなかったため、友達と呼べる人もおらず、ましてや、ただのクラスメイトの顔や名前などほぼ覚えていなかった。

「ちょっとあんた！まさか、うちの学校でも飛び降り自殺を、流行らせるつもりなの！？」

そして、さつき自分にタツクルをして来て今なお、意味の分からない事を言ってるのは、東島 美智代だったと思う。

こいつの事は、たまにクラスの連中が噂をしているのを耳にする事がある。

だがその噂は、東島はよほどの変わり者らしくあまり良いものではでないむしろ、悪口に近いものだ。

「美智代、別に板東くんは自殺をしようとしていた訳じゃないと思うけど」。

苗木は、学級委員長だけではなく生徒会にも入っていて。

その見回りで、たまに放課後の屋上にも来ていた時もあり。

後記が放課後度々屋上に来ていた事を知っていた。

しかし、校門で下から見たときは

後記だと、気づかなかったのだ。

苗木が、「うんしょ！」と
声を出して、後期を起こすと。

「だってこいつ！私を取り抑える前に
暗い顔して、へそろそろ行くか
なんて言ってたのよ！」。

美千代が、起こしてもらった、
後記をもう一度睨みつけていった。

取り抑える？

突き飛ばすの間違いじゃないのか？

後記は、その言葉に苦笑いをする。

「それだけで自殺と決め付けるのも
どうかと思うけどな」。

和之は、ぼつりとかういつてから
厭きた感じに頭を振った。

「いや！この暗い顔、そして希望も欠片も無い瞳
・・・絶対こいつは、何かに取り付かれているわ！」。

この、すごい自信が何処から来るのか
2人は、毎回不思議だった。

「はい！」

美智代が、2人の後ろに回るり、グイッと、苗木を後記の前に押し出すと。

「さあ苗木様、あの気味の悪い男の子に何か取り憑いている者は居ませんか？」と撫で回すように言った。

お前が、ある意味一番気味悪いって。

和之は、美智代を横目に思う。

「え!?!?・・・あ・あの」。

不意に、前に押し出された苗木は一瞬、後記と交わってしまった視線を恥ずかしそうに落とした。

「いえ、何も・・・」。

「え!!!本当に?」。

「う、うん」

ゆっくりと頷く、苗木を

「何だ、つまらないの」と言って押し出した手を離れた。

「じゃあ何で、あんたこんな所に一人でいたの!?!」。

美智代は、後記の方を見てすかさず聞いた。

「別に、俺が何処に居ようと
勝手だろ」

やっと、自分の意見が言える。

「それと、その前に言うことがあるんじゃないのか？」

後記は美智代を真っ直ぐに見て、
ドスのきかせた低い声で言った。

「顔に似合わず

こんなところで、黄昏てるんじゃないわよ!」。

「・・・」

美智代の、意外な返答に
一瞬全員が凍りつく。

黄昏時の屋上、男子生徒が一人夕日を眺めている、
確かに、ドラマなどではそういうシチュエーション
ならばそうなのだろうが。

そう言う事を言わせたのではない、
むしろなぜ、そんな事をいちいち言わせる必要がある。
普通の人ならば、さっき勘違いとは言へ

自分にタツクルした事を、誤るのが常識ではないのか。

「こいつ、馬鹿か？」

後記は疲れた様子で、

美智代を指差して、和之に言った。

「まあ、馬鹿とゆうか……
ある意味病気かな」

後記は、なるほどと頷く。

「だから、あなたは此処でいたい
何をしていたの!？」

美智代は、今和之と後記に言われた
事をまったく気にしていない様子で
もう一度聞いた。

「だから、俺の勝手だろって!!」

二回同じ質問をされたことに
腹だった後記は、
少し怒鳴って言った。

その、怒鳴り声に苗木は
体をビクツとさせた。

そつだ、行く所があつたんだ!。

後記は、さつき一人になる前に話をしていた
者の事を思い出した。

「あの、美智代？

そろそろ行かないと、電車来ちゃうよ」

苗木は、チラッと腕時計を見て言った。

「そうだった！！

今何時？」

苗木の、腕時計を覗き込む。

時間は5時10分を回った所だった。

ここから、駅までは急いでも20分ほどは掛かる

次の電車が来るのは、34分なので

そろそろ行かないと、駅で待つ事になる。

「そう言う訳で、私達急いでの……

もう行くわ！」。

「そうか……。俺は別にかまってくれなんて言っていないし

早く行けば？」。

後記は、どちらかと言うと早くこの3人と

離れたかったので、少しきつく言った。

「それじゃあ」

和之が、先に出入り口に向かうのに続いて
美智代と苗木も、屋上から出て行った。

「・・・・・・」

1人屋上に、ポツリと残された後期は
3人の後姿を見送と、空を見上げた。

「あの・・・・・・」

不意に声を掛けられ振り返る。
そこには何時戻ってきたのか
苗木の姿があつた。

「どうかしたか？」

後記は、周りを見渡して
苗木しかいない事を確認し
不思議に思う。

「えっと、さつきはすいません・・・・・・」

「え！何が？」

「美智代がぶつかった事です」

ああ、あれか！

そつえば結局、誤ってもらつてなかつた。

「それを言いに戻ってきたのか？」

「美智代ああゆう性格なので
多分もう忘れてると思うので」

「それで、お前が誤りに着たのか？」

「はい！」

後記は、美千代がこんな友達を持っている事に羨ましく思いそれと同時に、少し恨めしくも感じた。

「おーい！！苗木何してるの？おいて行くよ」

苗木の後ろを見ると、屋上のドアの前で美智代が、手を振っているのが見える。

「別に、俺はもう気にしてないし」

後記は、そう言い

苗木に早くいきなと言う風に、顔をチョイと、美智代へと向けた。

「それじゃあ板東君、また明日ね」

苗木は、後記に手を振ると

美千代のもとへ走っていった。

「また、明日・・・か」。

その言葉を誰かに言われるのは、
どれだけ振りだろう。

後記は、何かくすぐったいような

暖かな気持ちになり。
さっきまでとは違い
軽い足取りで、屋上を後にした。

僕と都市伝説 3

夕方の電車は、帰宅中の学生やサラリーマンなどで
ごった返していた。

美智代達は、入口付近で立っている人達を掻き分けて入ると
空いている席がないか、一様車両を見渡す。

まあ、こんな時間なので空いている席が
あるはずもない。

和之は、仕方なく吊革へ掴まり
空気が無かった、苗木と美智代が
それに寄りかかった。

「ちょっと、重いんだけど……」

寄りかかって来た、二人に言う。

「すみません……でも」

苗木の周りには、運が悪かったのか
囲むように中年のサラリーマン達ばかりがいた。

「込んでるんだから仕方ないでしょ
年頃の女性は、痴漢に狙われやすいんだから
ちゃんと守ってよ」。

美智代が、和之の耳元で囁くように言う。

「それと、重いはよけい!」。
と、怒る。

車内は、乗客の息が交じり合っていて少し臭く、
掴んだ吊革は、ベタついていて
少し気持ち悪かった。

いつものことなのだが、
何回乗っても、これだけは慣れない。

「えー、次は**駅」。

アナウンスが流れ、
ゆっくりと動き出す。

停車していた駅を抜けると
直ぐに、電車は速度を上げ
窓の外からは、夕暮れの町並みにが
広がった。

「それにしても、さっきは失礼しちゃうわ!」

「うん?何かあったか?」

美智代がムツとした視線を、和之に向けて

「板東って奴よ」と、
怖い顔で言った。

「人の事、馬鹿呼ばわりして」。

「……美智代、気にしてたんだ？」。

苗木が、以外だなあとゆう風に聞くと

「当たり前よ」と

頬を膨らませて、視線を窓の外へ戻した。

「大丈夫！お前は馬鹿じゃない
ただ、病気なだけだ！」

和之は、鼻で笑って言う。

冗談で言っただけだったが。

美千代は、かなり気に触ったらしく、
無言で和之の、足を踏みつけた。

「……ごめん」。

「……」。

「美千代は、ちょっと変わってるけど馬鹿じゃないと思うよ
気にしなくて大丈夫だよ」

「もう良いよ」と、美智代は小さくため息を吐くき

「それよりも本当にあいつに、何も憑いてなかったの？」

と、苗木の顔を見て言った。

美千代の言葉に、苗木は「うん」と、頷く。

苗木は、屋上で後記を見たとき

確かに、後記に害を与えるような

悪いものは見えなかった。

美千代は「そうなんだ……」と言い

「まあ、何か憑いてたら

怖がりの苗木の事だから、

怖がってもう一度戻ったりしなかったか」と
笑って納得した。

だが、美千代は後記の事を気にしていた。

あの時、見た後記の姿はすごく寂しげで
見た事もないほど、暗い目をしていたからだ。

電車は駅を2つ越えて

目的の駅に着いた頃は、

もう日が落ちていおり。

西の空だけが、気味の悪い感じの茜色に、
染まっていた。

3人は改札を抜けて

駅から出て、少し歩くと。

車が絶えず行きかう大通りへとでた。

大通りと言っても、道の両側にはカラオケ屋はおろか

コンビニやガソリンスタンドも無い。

ほとんどが、木造の古いアパートや小さな公園
あとは、ちよつと蹴ったら壊れるんじゃないか
と、思っくらの家が、

ちらほら建っているだけだった。

「さてと！」先頭を歩いていた美千代が、急に立ち止まると、「急ぐわよ」と、和之と苗木の方を振り返る。

「なあ、二校に着いても校内には入れてもらえないと思うぞ」。

こんな時間って事もあるが、最近の多発している自殺もあるので警備は厳重になっているはずだ。

和之が、心配気に言ったのだが美千代は、気にしなくて大丈夫と先に行ってしまう。

いやいや気にするよ。
とゆうか気にしなさい。

和之は肩を落として、先に行ってしまった美智代の後を早足に追う。

信号が設置してある、大きな交差点を2つ越え50メートル程歩くと、路地を左に曲がり商店街へと入って行った。

今通って来た道にやはりスーパーなどは無くどうやら近所の人達はこの商店街が買い物をする場所なのだろう。そんな商店街は、夕食をかう主婦や学校帰りの学生で賑わっていた。

都会育ちの3人には珍しい、八百屋や魚やの

威勢の良い客引きの声に、度々ビクツとしながらも先を急いだ。

商店街は、中高生の通学路らしい。

周りには学生服の若者が多く見られた。

この辺りに違う学校の生徒が来るのが珍しいのだろうか？。

さつきからすれ違う二高生はチラチラと和之達を見ってくる。

多分、ほとんどの学生が見ているのは和之ではなく、苗木と美智代の方だ。

二校の男子生徒達は、3人の横を通り過ぎる度に

「今の一枚の子、結構可愛くない？」

「え！？どっちが？」、「右の子は、俺てき80点！」などと、五月蠅い声が聞こえていたからだ。

あんな、大きな声で美智代達の話しをしてこちらに聞こえないとでも、思っているのだろうか。

和之は、顔だけを90度振り向かせ

二高生の後ろ姿を、睨みつけてやった。

大丈夫かな？。

美千代は、あの類の五月蠅い高校生を毛嫌いしている。

もしも、限度の越えた嫌味的な言葉が聞こえてきたら

間違いなく、あいつらに蹴りを入れに行ってしまう。

2人の後ろを歩いていた和之は、
気づかれないよう隣に並ぶと。
チラッと顔を覗き込んだ。

美智代は、何かを楽しみにしている様な表情をし、
目をキラキラと輝かせていた。

どうやら、今の美千代には
五月蠅い二高生達は眼中に、ないらしい。

和之は、心配して損したと
顔を顰めた。

そう言えば、初めてコイツと会ったときも
こんな目をしていたな。

俺は、この年になるまでずっと
自分が生まれた故郷で育ってきた。
友達も多かったが、ほとんどが物心付いたころから知っている
奴ばかりで、いづどんな形で知り合ったのかも覚えてない
まさに、幼馴染ばかりの中で育った。

高校二年生に上がって直ぐ
親父の仕事の都合で、故郷を離れて違う土地に
引っ越さなくてはならなくなってしまった。

この年にもなって、正直あの時の心境は
自分でも最悪なくらいダサいと思っている。

すごく怖かった。

今まで、右も左も知っている顔しかなかったのに
学校に行っても、街に行っても誰一人知らない人ばかりで
第一に、家から出ると空気がまるつきり違かった。

何一つ、知っているものは無い。

まるで、自分が迷子の子猫にでもなった気分だった。

しかし、なにより不思議だったのが
美智代だ。

こっちの学校に入っつてすぐの頃
俺は美千代の隣の席になった。

自分から友達を作った事のない・・・
いや、どうやって作れば良いのか知らなかった俺は、
案の定、いつも学校に行っても一人で
誰かに話しかけられても、シカトか素っ気無い返事しかできなかった。

そんな俺を美千代は、休み時間など
いつも、隣の席でジューツと睨み付ける感じに
顔を見てきていた。

話しかけられる分けでもなく、ただ見ているだけ。
そんな行動にたまにイラッとしてしまい、
睨み返すと、必ずすぐ何処かへ行ってしまう。

俺を馬鹿にしているのか？

一度何か言ってやれば、止めるだろうか？
だけど、迷子の子猫の俺にそんな度胸があるはずも無い。

俺は、家に帰っても

美千代の不思議な行動が気になって仕方なかった。

睨みつけられたら、睨み返す。

毎日いたちごっこを繰り返す事一ヶ月

俺はある事に気が付いた。

美智代の目は、俺を睨みつけて居る時

何かを期待しているように、キラキラと輝いている。

「は？」

それに、気が付いた俺は

いままで、美千代の行動に

一度も、何も言えなかったはずが

不意に、声がこぼれ落ちた。

「あんだ、いつも何見てるの？」

ただ、和之の顔を見ていただけの

美千代が、このとき初めて話掛けてきた。

「こいつの、後頭部……」

和之は、別に嘘を付く理由もないので
気づかれないように

前の席の人を指差しいった。

「はい？……それだけ？」

「うん、それだけ」

美千代は「なんだあ」と落ち込むと

「つまらないの」と軽く背伸びをした。

「と言うか、それ楽しい？」

「これといつては別に……
だけど、この一ヶ月でこいつ髪の毛のびたなあ」

「あつそ」

美千代は、素っ気なく言う
と席を立った。

そして、教室から出口まで行き、
何かを思い出したように、小走りで戻ってきた。

「あんた、幽霊とか興味ある？」

あの時、なぜだか俺は、
簡単に言う「YES」と答えてしまった。
興味がまったく無いと言うわけではないが。
あんなに、ハッキリと言うほどある分けでもない。

今でも、この目をしている、美智代を見ると
たまに、初めて話した日を思い出してしまう。
あの時も「NO」と答えていたら
俺は、未だに一人で前の席の奴の、
髪の毛の成長を観察する学校生活に

なっていただろう、もしかしたら観察日記まで書く羽目になっていたかもしれない。

そんな、自分を想像するとゾッとしてしまう。

和之は、もう一度美千代の顔を覗き込んだ。

そう、今もあの時と同じキラキラと目を輝かせている。

今度は、美千代が和之に気づくと「何か、顔に付いてる?」、「とありがちな台詞を言ってきた。

「いや別に……
そんなに、楽しみか?」

「何言ってるの! 当たり前じゃない!」

「そうか」

俺は、この目に助けられたのかもしれないな。

和之は、小さく笑った。

「着きましたね」。

苗木は、立ち止まって言った。

色々思い出していた内に、
いつの間にか、結構歩いていたらしい。

二校の校門の前で、三人は立ち止まると
、和之は周りを見渡した。

空は暗くなって、

校門はもうはやしまっており、
その横に立っている

外灯の明かりが、不気味な夜の学校を
なおさら、気味悪くさせていた。

僕と都市伝説 4

「ここか」

板東後記は、長い石段の下で立ち止まった。

長く高い石段の周りは、林が広がっており
そこから、けたたましいくらいの、虫の囁りが聞こえてくる。
顔を上げ頂上を見ると、そこには鳥居が小さく見えた。

「上るの面倒くせえな……」

後記は、汗で滑っている額に手をやり。
声に出して、ため息をついた。

もう帰ってしまおうか。

目的地を前にしてまで、
また思う。

此処に来るまで、結構な時間道に迷った。
最早時刻は、19時を回ったところで、
そろそろ日暮れを迎える頃だ。

椅子があつたら座りたい。

後記は、体の重さに心中強く思った。

夕方とは言え、季節は夏

日中のきつい日差しが無いだけ、まだましなのだが。
クソ暑い熱気の中、1時間そこら歩き回った体は
辛いものがあつた。

今こうして、石段の前で何をする訳でもなく

ただ突つ立つて居るだけでも。

容赦なく時間は過ぎて行き。

息苦しい夏の熱気と、耳障りな虫の声に

後記の体力は吸い取られていく。

別に何の義理があつて、こんな事をしている訳でもない。

ただ「・・・お願いします」と、

屋上で俺に言つた、あの子の顔を思い出すと

途中であきらめて帰ろうとした自分を、

足が勝手に此処まで連れて来ていた。

後記は、制服のネクタイを緩め

リュックを背負い直すと、

一段・・・

また一段と、

石段を登っていく。

夏の風物詩と言える、この虫の音も。

今の、後記にとっては

学校の、五月蠅い学生達と

何も変わらない感じがした。

聞こえている

色々な虫の声の中でも、一際目立って聞こえるのが

やはり、蝉の声だった。

後記は、頂上まで登りきると
一旦足を止め、目の前に立っている
鳥居を見上げた。

鳥居の頭から、丁度10センチくらいだろうか
そこに何か解らないが、黒い点のような物が見える。
目を細めて見るとそれが何か直ぐに解った。

蝉だ。

良くは見えないが、あれは多分
油蝉だろう。

「おかゝさん！あれ取ってえ」

幼い頃の、俺は電柱に止まっていた
蝉を指差して言った。

「あら、珍しい
こんな街中に居るなんて」と、俺の隣に来て母は言つと
「でもね、せつかく休んでるんだから
捕まえたりしちゃ可哀想でしょ」。

母はにつこり、俺に笑いかけた。

「それに、蝉さんは
土から出て、一週間しか生きてられないのよ」。

「え！どうして!？」

「うん……」

それはママにも解らないなあ」

「そうなんだあ」

確かあの後も、

幼い俺は「でも欲しい」と、

駄々を捏ねその場を動こうとしなかった。

そんな俺に、

母は少し困った表情をしながら

日が暮れるまで、

そばで何かを言いながら話かけてくれていたのを
覚えている。

なぜだろう、今ではもう

最後に話したのは何歳の頃だったのか……

名前はなんといったのか……

そんな大切な事すら、思い出せないのに。

あの時の、母の顔はハッキリと

思い出せた。

後記は、周りに誰もいない事を確認すると

力一杯鳥居に蹴りを入れた。

ドンっと、濡れたタオルを壁にぶつけた様な

鈍い音が周囲に響き渡り

留まっていた、蝉は驚いて逃げる感じに飛び去って行く。

なんだ、しょんべんしないじゃないか。

それを、見送った後記には
鳥居を蹴った足の痛みと、
なんとも言えない気持ち悪さだけが残った。

「あゝあ．．．いけないんだあ」

「誰だ！」。

不意に、すぐ近くで声がした。

後記は、誰かに見られたと思い
周りをキョロキョロと見渡したが
やはり、さつき確認した時と同じで
誰一人いない。

風が、音を立てて強く吹き
周りの木々達が、キョドっている後記を嘲笑うかのように
ガサガザと、葉音をたてた。

「気のせいか．．．」

さて．．．

あれは何処にあるのだろう。

後記は、気を取り直し
鳥居の向こうに見える
社を見つめた。

まあ、この辺りで間違いないはずだから

少しうつついていれば、その内見つかるだろう。

「おや？こんな時間に
学生さんが一人で、珍しいね」。

後記は、後ろから声を掛けられた。

今度は聞き間違いじゃない、
だが、さっきの女性の声とは違い
野太い男性の声だ。

振り返ると、丁度石段に登りきった所に
買い物袋を持った、白髪の男性が後記を見ていた。

「ん！？君……」。

後記と、向き合うなり
男性の表情が硬くなる。

「………何ですか？」

後記は、まさか鳥居を蹴ったところを
見られたかと思い、目をそらした。

さっき、石段の下から今居る場所を確認したと通り
後記が、この鳥居を蹴ったのは下からでも
十分見ることが出来る。

「いやいや、なんでもないよごめんね」と、言って
後記は、安心してホッと胸を撫で下ろす、

男性は表情を崩すと「家に何か御用かな」と、近づいて来た。

家？

なるほど、ここの神社の人か。

見た目からして、息子とゆう年ではなさそうだからかと言うと、やはり神主さんだろうか。

「ちょっと探し物があつて」

「落とし物かい？」。

「落とし物というか……」

聞くべきだろうか。

聞いたほうが早いのだろうが
変に思われても困るしな。

「もうそろそろ、暗くなるし

すぐに、使うものとかじゃなければ
明日にしたほうが良いよ、

それにもしも家の者が見つけたら、
こちらで預かっておきますし」。

神主さんは笑って

やさしそうな声で言った。

「……あの御神木とかつてありますか？」

後記は、思い切って
恐る恐る聞く。

何か、架空の落し物を作り出して
嘘を吐くのもありなのだが、
明日また、来るのもかなり面倒くさいのも
あった。

「え？、ここ神社のかい？」と、言って
驚いた表情をしたが「それなら、その本堂の裏を少し行った所に
在るけど」
と、あっけなく教えてくれた。

「そうですか、ありがとうございます！」。

そう言つて後記は、神主に一礼すると
探している理由などを聞かれると厄介なので
ちよつと無愛想だが
急ぎ足に神社の裏に向かつて歩き出した。

「おーい！御神木のすぐそばには
見た目より深い沼があるから、気をつけるんだよ！」

後記は、振り返らずに頷くと
早足に、林道へ入って行った。

「・・・」

神主は、後記が見えなくなるまで、
まじまじと見送った。

辺りは暗くなっていることもあり
後記の姿はすぐに見えなくなる。

見た目より子供ではなさそうだから
多分大丈夫だろう。

だけどあの、辺りには
今はなるべく、寄って欲しくないんだけどな。

持っていた、買い物袋を
強く握りつた。

「さて……あの子もそろそろ帰ってくる頃かな」

神主は、強く握った買い物袋を
見て呟くと、「夕食の支度をしなくては」と
神社の隣の家に入って行った。

一歩踏み出すと
ジャリ！と、足元から
石を踏みつける音がする。

辺りは暗くて、
少し、急いで歩くと
木にぶつかってしまいそうだ。

気味が悪い……

そんなに、遅い時間ではないが
薄暗い林とは、なんとも嫌なものだ。

後記は、ガサツと周りで
音がするたびに、立ち止まって
後ろを振り返った。

いつも、気味悪いモノは見ているが。

やはり人間には、毎日のように体験していると
自然に「慣れ」いうものが身につくんだろう。
今は、いつも見ているモノより、
嫌な気持がした。

「まだか・・・」

恐怖のせいか、
体がいつも以上に重く感じ
それほど、歩いていないはずなのに
酷く息が上がった。

それでも、さすがにそろそろ
見えてきて良い頃だ。

後記は、額から冷たく流れた
汗を、袖で拭う。

暗闇で、距離感覚が鈍っているのか
それとも・・・

顔を上げ、呼吸を整えた。

「いつまで・・・隠れているつもりだ？」

後記は息の上がつた声で言った。

「……気づいていたんですか」

後記の、問いかけに
背後から、スウツと

髪の長い小女が現れる。

「うん……屋上で急に消えた時
まさかとは思ってたんだけど、
さつき鳥居を蹴った時に、確信した」

後記は振り返り、
少女と向き合う。

学校を出てここまで来るまで
異様なまでに、体が重かった。
最初は暑さのせいだとばかり、
思っていたが、ここに来て解った。

「ごめんなさい、お願いした上に
勝手に取り憑いてしまつて」

「別に良いよ、お前みたいなのが取り憑くのは
いつも勝手だ……
それに慣れてるしな」

少女は申し訳なさそうに俯く。

「そんな事より、さつきから
同じ場所を、グルグル回っている気がするんだけど
これって……」

少女は小さく頷いた。

「なんか、この道に入った時から体が痺れる感じがしましたし
後記さんが、御神木に近づく度に、
入口付近に戻ってます」。

なるほど、結界か。

こんな感じに、周りの風景が同じような
ものばかり広がる場所には、非常に張りやすい。
それに、今はあいにく夜。

気づかない内に、嵌っていたみたいだ。

「仕方ないこのままじゃ、らちがあかないから
一度戻って出直そう」

「え、でも！この状態じゃ帰るところか
林からも出られないんじゃない……」

「何言ってるんだお前？
林とは言え、ここはまだ神社だぞ」

後記は、木々の間から見える本館を指差した。

「多分、この結界は最近ここの御神木で何かやっている

奴が張ったものだろうが・・・

まあ、初心者が結界を張ったのは確かに凄いだけど
こんな神聖な場所に張ったものなんて
あそこに向かって歩いていけば、そのうち出られる」。

「・・・・・・・・」

呆氣にとられていた少女に、後記は「ほら、行くぞ」と
叫ぶ。

「後記さんって凄いですね!」

後ろで少女は言った。

「・・・・・・・・」

少女は、後記を褒めたつもりだったのだろうが
この類の知識を持っている自分を嫌っていた、
後記は、睨み付ける感じに少女を見た。

「・・・・・・・・」

後記は足を止める。

「結界って言うのは、少し勉強すれば
一般人にも、すぐに張れるものだ」と、言って
少し間を置き「ましてや、人を殺してしまう程の呪いを
やってのけた、人間には簡単な事だろうさ」と
強い口調で言った。

少女は、「殺す」と言う言葉に、悲しい表情をした。

「俺はもう疲れた、早く帰るぞ！」

後記は、落ち込んでいる少女を尻目に、歩き出した。

別に、少女の言葉にイラついてこんな事を言った分けではない。

ただ、本当に疲れていただけそれだけだ。

それに、今はそんな事よりも彼女ととうぶん一緒に過ごさなくてはいけないその事のほうが、だるくて仕方ない。

取り憑かれたのだから、そう簡単に離す事は出来ないはずだ。ましては、無理やり離すことは後記にとって

自分の精神的にも、彼女の事を考えてもなるべくしたくはなかった。

後記は、少女が後ろをトボトボ着いてくるのを何度も何度も、振り返って確認した。

多分こんな感じの行動は、はたから見れば人間と幽霊ではなく、

兄と妹に見えるのだろうか。

もしも、彼女が普通の人にも見えればの話だが。

後記は、空を見上げて

そうゆう事は考えたくない
と首を左右に軽く振った。

そして少女は、後記が振り返り
自分の事を確認しているのに
気がつく。

申し訳なさそうに、

ニコツと綺麗な笑顔を作って見せた。

死んでも人間らしい笑顔はするんだな。

しかし、あんな死に方をした少女が
どうして幽霊になってから、
今みたいな笑顔を出来るのか
後記にはどうしても分からなかった。

僕と都市伝説 5

校門は、閉まっていたのだが
校舎の中には先生が残っているのらしい。

丁度、和之達の胸辺りの高さまである
鉄で出来た、門にとうせんぼされた三人は。
学校の、あちらこちらに
まだ電気の点いている、部屋があるのを確認した。

それでも美智代は、
見つかる事を恐れていないみたいで
女の子とは思えないほど淫な体制で
門に跨り、暗い校舎へ入ろうとする。

やっぱりな。

和之は、美智代が門を越えようとしたときに
スカートの中にある縞々のチェックが入った
白いものが見えてしまい、慌てて目をそらした。

もしも、俺や苗木が

「今日はもう無理」だと言った所で

「はい、そうですか」と

素直に帰ってくれるはずもない。

かといって、苗木と2人で

美智代を置いて帰るわけにもいかないし。

和之は、横で困った顔をしている、

苗木を見た。

「何してるの、早くこっちにおいでよ」

向こう側に行った美智代は、

スカートに付いた砂埃を、手で払うと。

先生方に気づかれないよう

静かな声で2人を呼んだ。

やれやれと、和之もさっきの美千代と同じ格好で
門の上に跨り。

2人より、10センチも背の低い苗木を
一人じゃ、とても上れそうにないので
腕を掴み引つ張り上げた。

苗木の体は、見た目どなりに軽くて
あまり力をいらなくても、すんなりと持ち上がった。

「すみません、ありがとうございます……」と、
苗木も門の上に跨って、言うつと
ハツと2人とも顔をそむける。

それもそのはず、門の上で跨った2人の幅は
15センチほどしかなく。

向き合った顔は、少しバランスを崩し
前後によるめきでもすれば、キスしてしまいそうなほど
間近にあった。

よく考えると、俺は周りの男子から見たら
かなりおいしい立場に居るのかもしれない。

いつも、女子2人とばかりいて
帰りも一緒に帰っているからな。

後記は、今まで全然そのような事は
意識した事もなかった。

だけど、こっちの学校に男子の友達が
一人もない事もあるから、
何も、気に周りの視線をすることは
ないのだろうけど・・・

「なに2人してときめいちゃってるの」

いつから見ていたのか
美千代は、下で腕を組んで
厭きれた顔をしていた。

「まあ、そうしていたなら、
朝までもそこに跨っていれば
良いけどさ」

和之と苗木は、美千代のキツイ言葉に
急いで門から降りた。

「よし」美千代が、2人が降りたのを確認すると
「苗木！何か見える」と、校舎みて言った。

「薄気味悪い校舎が、良く見えるぜ」

「和之に聞いてない！」。

「私も、校舎しか見えません」。

美千代は、苗木の答えに

イラだった感じで頭をかくと

「それじゃあ、見つからないように、

校舎を周ってみましょう」といった。

正面の、主に生徒達が入り出る

昇降口は、大きな扉が4つあり

手前の両側には、校舎に向かって

今風のコンクリートで出来ている花壇並んでいた。

和之は校舎に向かって、右側の花壇に目をやると

何かテープのような物で、囲まれているのが見え

不思議に思った。

花壇の近くまで行くと

それが何かすぐに理解した。

どうやら、この花壇が

今朝の自殺者の遺体が見つかった場所らしい。

花壇の周りには

警察が、よく事件現場などに張る

黄色いテープで囲まれていた。

和之は、体から血の気が引くのが

良く分かった。

花壇のあちこちには、

水で流しても、落ちなかったであろう

自殺者の血の跡が。

校門の外灯に照らされて

この近さだとハッキリと

黒くこびり付いてるに見えた。

和之は、これだけの血痕を見たのは初めてだった
多分、発見した時はもっと悲惨な状態だったんだろう。

今はこの光景を目の当たりにした恐怖よりも、
自殺した、生徒の最後の姿を想像してしまい、
なんとも居た堪れない気持ちでいっぱいになった。

「酷い……」

苗木は、和之の隣で

花壇を見るなり眉を潜め

力ない声で言った。

苗木も、この光景を見て

俺と同じ気持ちになり、

酷い、と言っ言葉为零したのだろうか……？。

それとも、俺や美千代には見えない

何かを見て、言ったのだろうか……。

和之は、血に染まった花壇を見ているだけで
苗木に、その事を聞く勇氣はなかった。

夜の生暖かい風が吹き
花壇に張られている、
テープを揺らす。

「さ．．．行くわよ」。

佇んでいた2人に
美智代が言つと「なあ、ここまで来て言つのも
何だけど、流石にもう帰らないか．．．」と
和之が切り出した。

「怖くなつた？」。

「いや、怖くはないけど．．．」

「じゃあ、良いじゃない．．．
行くわよ」

「でもよお．．．」

和之は、これ以上はさすがにやばい感じがして
美千代を止めようとしたが。

いつもと同じで、美千代は勝手に先に行ってしまう。

美千代は、何も感じなかったのだろうか？。

今の、血の着いた花壇を見て。

何も言わずに

校庭の方へ歩いていく、

美千代の後姿に。

和之は、あきれるばかりの苛立ちを感じた。

この学校の周りは、桜の木が何十も植えてありそれは、この学校を囲む形になっていた。

今は夏とゆうこともあり、桜は咲いていないが春になれば、入学生を迎えるように、学校の周り一面にさくらが咲くのだろう。

黙って美千代の後を着いていくと、校舎の裏へ出た。

そこは校庭になっていて野球部など運動部が使う白線を轢く道具などが、端の方に沢山置いてあった。

和之は一通り見渡すと、校庭の端の校舎側に、体育館らしき建物があるのが見える。

ここからだ、暗くてよくは見えないが、校舎から、その体育館へ移動するための道が一本続いているのが薄っすらと見えた。

多分、あそこを通れば校内までは無理だろうけど。中庭くらいなら、外からでも入れるようになってるだろう。

美千代は、浮かれ気分になり
急ぎ足で向かっていく。

「ちょっと、待って！」

後ろを着いてきていた、

苗木が急に、大声で呼び止めた。

美千代が苗木の傍まで戻ってくると「見つかったじゃない、静かにしてよ」と

、声なるべく出さずに、顔で怒る、

そして「どうかしたのか？」と、苗木のすぐ隣を歩いていた和之が聞いた。

「すみません……」

でも、あの教室に誰かいるみたいだから」

和之と美千代は、苗木が指差す、

自分達が今から、前を通り過ぎようと

していた一階の教室の窓から。

懐中電灯が何かの光が、チラチラと

校庭に向かって、出てくるのが見えた。

気づかなかった事にたいして、

和之と美智代が顔を見合わせる。

「警備員さんの見回りかな？」

「見つかったら、不味い事になるな」

このまま真っ直ぐに進めば、確実に見つかってしまう、しかし、ここを通らなければ体育館の道まで行けない。

かといって、少し校庭の中央付近から行こうとすれば
教室の警備員さんに見つかる前に、

二階の今だ電気が着いている部屋に居る、
先生方に見つかってしまいう可能性がある。

「居なくなるまで待つてみますか？」

「それもありだけど、もし少しでも
ベランダに出てこれたらアウトだ」

「だったら、待つのも面倒だし
その花壇に隠れて行こうよ」

どの教室にも、ベランダの前には
校門で見たのと同じ、花壇が設置してあった。

美千代は、その花壇の所でしゃがみながら
進もうと言っているようだ。

しかし、苗木なら行けそうだが
美千代や和之は、しゃがむと言うより
匍匐前進で行かなければ、頭がはみ出て
見つかってしまう。

「まてまて、そんなことしたら
制服が砂だらけになっちまうぞ」

「男の子なんだから、そんなのしょっちゅうでしょ」

確かに、小学生の頃は毎回復を汚して帰ったものだけど

この年になって、流石にそれは辛いもある。

あの頃なら、遊んで汚した服を見た親は怖い顔をして怒られるのが当たり前だった。

今となっては、怒る前にあきれた顔をされるだろう。

それが、怒られるよりも辛いつて事にこの年になって気がついた。

「ほら、だらだらしないで早く行く」

「なんで、俺が先に行くんだよ」

「だって男の子だし」

美千代は、和之から少し離れ一回転してスカートをアピールして見せた。

「・・・わかったよ

さっきは気にしなかったくせに」

「さっき、て？」

「校門だよ」

みるみる内に、美千代の顔が赤くなっていく。

「見たの・・・」

「なんだよ、その年になってスカートの中身くらいで・・・」

大体、年頃の女性は自分から見せてくるだろう」

それに、さっきのは行為で見たというより
事故的に見せられたのだが。

「それは、一部の人でしょ！
なによ、童貞君のくせして、分かったような事言ってるの」

和之は、美千代の童貞と言う言葉に、
何か心に突き刺さるものを感じた。

「おまえ、勝手に人の事童貞扱いするな」

和之は、気にしている事を言われ
感情的に言ってしまう。

それは、自分が童貞であると
発言しているようなものだった。

「変なDVDばかり見てるから、
そんな勘違いするのよ！」

「・・・・・・」

和之は黙ってしまった。

「あの・・・・・・」

睨みあっていた、二人に
苗木がやつと声を掛けられたと言う感じに
話題を遮った。

「そんな大声を出すと本当に見つかってしまいますしそれに・・・そろそろ時間が」

和之は、何も言わずに美千代に背を向け花壇の前まで行くと、うつ伏せになる。

夜風に冷たくなった校庭の砂の上に、体を乗せると自衛隊の訓練のように、張って進んでいく。

今さっきは、勘定的になっていて考えなかったが美千代のあの態度からして、どうやらまだ経験はないようだ。

そう思うと、和之の心は怒りを忘れ不思議な安心感に満ちた。

「・・・ねえ」

「なんだよ」

後ろを着いてきている美千代を見る。

「え？何」

「今、おまえ声かけただろ」

美千代は掛けていないと首を振り、それより後ろを着いてきていた苗木を見たが、彼女も同じ反応をする。

「おかしいな」と、思いながらも、進もうとすると
「ちよつと……」と、また声を掛けられた。

どうやら、声は懐中電灯の光が出てきていた
教室から聞こえてきているみたいだった。

「ねえねえ、教室に居るの警備員さんじゃないわよ」

美千代は、少しだけ身を起こして
花壇から顔だと、教室を覗き込んで言った。

「わあ……」

「おまえ、見つかるぞ」と、和之は声は大きく出してはいないが
怒鳴る感じに口だけ大きく開いて見せて、言った。

「大丈夫、あの2人もう夢中みたいだから」

2人……？。

こんな時間の教室に、警備員さんではなく
誰が居るとゆうんだろう。

和之と苗木は、美千代が何を言っているのか分からず
顔を見合わせと「おい……何が見えてるんだ」と
美千代に聞いた。

「五月蠅い、今良いところなんだから」と、美千代は怒り
「気になるんなら、あんた達も見てみなさいよ」と、和之と苗木を

見た。

美千代の言葉に、2人は渋々体を起こす。

暗い教室の中には、確かに2人の人間の影があり
端の机に置かれ付けっぱなしにされている、懐中電灯の光が
一直線に、校庭を照らしていた。

「・・・なんだ？」

和之は、異様な動きをしている

2人の人影を、良くみると「・・・ッ!!」
声を上げそうになった、口に手をやって抑えた。

マジか！

月明かりに照らされ、見てしまったものは
夜の教室で行われている、男女の性行為だった。

この学校の、女子生徒だと思われる女性は。
ブレザーとワイシャツを、手首の所まで下ろし
ブラジャーは、まだ膨らみ始めたばかりの胸に上げ乗せている。
そんな、和之達の普通の高校生にとっては
過激な格好をしている。

和之は、生唾を飲み、何かに取り憑かれた様に
その光景を見続けた。

暗くてよく見えないが。

男性は、女生徒の自分を誘うようなその行動に

白い歯を出して、不気味な笑みを浮かべる。

「お、おい……あれはカップルかな？」

初めて生で、性行為を目の当たりにしてしまった和之は。

体の震えが止まらず、声までも震えていた。

「そんなはずないでしょ、

どう見たって、男性の方は30は行ってるわよ」。

だよな、と

和之は頷く。

「じゃあ、どんな関係なんだろう」

「あの人、ここの学校に勤めている保健の先生で
名前は、多識 優兎先生

だったと思います」と、苗木は、顔だけは教室の
2人を見つめたまま言う。

「苗木、知ってるの？」。

「いえ、知ってるって程でもないけど、
一度生徒会で、こちらの学校に来た時に
お会いしました」。

「なるほど、生徒と教師の禁断の関係かあ」と言っ
て美千代は、和之に笑いかけた。

あの2人が夢中な内に

この場所から、早く離れたかった和之は

「そろそろ行こうぜ」と、美千代に言ったが。

「え？もうですか・・・」と、すかさず美智代の奥から苗木が、
言ってきた。

そんな、苗木の意外な言葉に、口を半開きにして驚いた。

「あ・・・いえ何でもないです」

苗木は、とっさに自分が言った事に、顔を赤く染める。

「そうね、見てるのもあきたし
行きましょうか」。

美智代は、しゃがみながら前に出て
2人の手を引っ張る。

あんなものを見たのに、
美智代は、何の変哲もなく
ただ、いいものを見たと言っ感じに
和之達と、その場を離れた。

それにしても、
今のは、
すごく驚かされた。

教室で行われていたを見てしまった事も
驚いたのだけれど・・・

それではない。

そう、苗木の事だ。

普段は、俺や美智代と違い
真面目な性格な子で。

一般の高校生からすれば
仕草や言葉使いからしても
自分たちよりも、全然大人に見える。

そんな、彼女が
あんな、いけない行為を
少しも怖がらず、興味心身とゆう感じに
見続けていた。

和之は、足を止め
あの時の苗木の声を
思い出す。

あの時、いままで見たことない
もう一人の苗木の姿を見てしまった気がしていた。

「どうかしましたか？」。

立ち止まっていた和之に、
後ろを歩いて居た苗木が、追いついき。
すぐ隣で言った。

「いや……なんでもない」。

しかし、俺の中での、

苗木という友達の、姿が変わってしまった分けではない。

コイツはいつも、おっとりした性格で

美智代に、あっちこっち連れまわされても

何一つ文句を言わない、それが苗木だ。

ただ、俺の知らない苗木を見てしまっただけ……

それは、今の学校に来て、

苗木と友達になってからまだ間もない俺が

やっと知った、いつもと違う苗木の姿だ。

和之にとってそれは、恐怖や嫌な事ではなく

むしろ、嬉しい事だった。

外から校舎の中庭へ、抜けると

急に、早足で先頭を歩いていた美智代が立ち止まる。

和之は、どうかしたのか？と聞こうとしたが

美智代の隣に来てすぐに、その分けが分かった。

中庭は、四角い空間になっており

それを囲む感じに校舎は立っていた。

そして、校舎の窓には

残業か何かでまだ残っているのだらうと、思われる先生方が居る
教室の電気が着いた、部屋が５つほどあった。

「はぁ……ここまでか」

美智代が、残念そうにそう言った。

和之は、ここに来て気がついた。

いつの間にか、3人の目的が
この二校で起こっている自殺事件の
探索では無く。

ただの、校舎の探検になっていた事を。

「なあ、本当にもういいだろ・・・
そろそろ、帰ろうぜ」

和之は、腕時計を見る。

時刻は、8時をとくに過ぎていた。

「うん・・・そうだね」と、美智代は肩を落とし
でもその前のに、と苗木に近づいていく。

「苗木、ここまで来る途中何か居た？」

美智代は、早口に苗木に聞いた。

しかし、苗木は何も答えず
まるで、何も聞こえていないように
俯いたままだった。

そういえば、苗木の奴
さつき最後に、話しかけられてから
何一つ、言葉を言っていないな。

不思議に思った、和之が「おい、どうかしたか？」と
肩に手を置いた。

和之は苗木の、体に触れて分かった。
震えている、それも目では分からないほど小刻みに、
物凄い早さで。

「ちょっと！苗木大丈夫？」

「気分でも、悪くなつたのか？」

和之が、苗木の体をやさしく左右に振ると。
苗木は、やっと2人を見るようにして顔を上げた。

その顔を見るなり、和之と美智代は
驚いて後ろへと、一歩あらずさる。

「・・・お、おい」

和之と美智代が、見た顔は
さつきまでの、苗木とはまったく違い。
真っ青と呼んで良いほど青ざめ、
唇は、元の薄いピンク色が嘘のように、紫色に染まり
充血しきつた目を、カツと開き後記たちを見ている。

和之と美智代は、あまりの苗木の豹変ぶりに
声も出せず、ただ苗木をそんな見ていた。

そして薄気味悪く、2人に向かって笑みを浮かべると。
顔だけを、中庭から屋上を見上げ

そのまま、雪崩落ちるようにしてその場に倒れこんだ。

2人は少しの間唖然として、倒れた苗木を見つめていると

やっと、我に返った美智代が「苗木！」と叫んで苗木の傍に走る。

「苗木大丈夫？」

美智代の問いかけに、苗木は苦しそうに眉を揺らした。どうやら、気を失っているだけのようだ。

青くなつた顔も、いつの間にか元の綺麗な肌色に戻り、さっきまでの苗木の姿が幻のようだった。

今のはいつたい、何だったのだろうか……
和之は、気絶している苗木を抱き起こし、抱えると今は早く帰った方が良さそうだと、思い
「行くぞ」と、美智代に言った。

「ちょっと、ドサクサに紛れて苗木の変なところ触ったりするんじゃないわよ！」。

苗木を抱きかかえた、和之を見て美智代が、キツイ口調で言う。

和之は、そんなことする分けないだろ、と美智代を見た……。その時だった。

パチン！パチン！と、突然異様な音が中庭のあちこちから聞こえ始める。

その、静けさの中響きわたる音に

ビクつくと、

帰ろうとしていた足を止め、
恐る恐る、和之と美智代は
中庭の方を、振り返った。

「今度は、なんなんだ」

振り返ると、音の正体は直ぐに分かった。

中庭周辺の、一階から三階までの
教室の電気が着いたり消えたりを
繰り返している。

しかも、それは気味悪い事に
誰かが、行為的に電気のスイッチを
オン、オフしている感じではなく。

電球が切れた感じに、パチパチしていたのだ。

2人は、後ずさり息を呑む。

何より、気味が悪いのは
今さっきまで、どの部屋も
電気は着いていなかったはずだ。

和之は、背筋に凍るような寒気を感じた。

「わあ……ポルターガイスト現象だわ」

その光景を見て、隣で目を輝かせている

美智代の手をつかみ、和之は一目散に
来た道を戻り走った。

「ちよつと、何するのよ
せつかく霊現象に遭遇出来たのに！」

美智代は、和之に走りながら
文句を飛ばす。

しかし和之は、その文句に耳を
傾けている余裕は、無かった。

学校で、美智代が此処に来ると言った時の
虫の知らせの様な、嫌な感じはこつゆう事だったのだろうか？
今はとにかく、この学校内から出ないと
ヤバイ気がして仕方ない。

左手は、美智代の手を握り
右手は、背負っている苗木を押さえおり
流れ出る汗が、目に容赦なく入るのを
我慢しながら。

和之は、校門はまだ見えないのかと
息を切らして走った。

すると、ようやくさつき乗り越えた
校門が見えてきた。

和之は、校門の前で一旦苗木を下ろし
ふて腐れている、美智代を先に抱きかかえ
校門の上へと乗せる。

「ちょ、ちよつと自分で登れるって!」

「いいから、早く出る!」

和之の早く出ると言う言葉に「良いの、先に降りちゃって」と美智代は、気絶している苗木を指差した。

そうか、俺一人じゃ苗木を抱えて門を越えられない……

「何してるの、早く苗木を渡して!」

門に跨った体制で、美智代が両手を差し出す。

「でも、大丈夫か?」

和之は、心配そうに

苗木を美智代に渡す。

「うんしょ!」と苗木の体を受け取ると「大丈夫も何も、この子氣失ってるんだから

こつするしかないでしょ!」と、怒り「和之も早く上って……
下で渡す人が居ないと、どうしようもないんだから」

和之は、急いで校門を越えると

苗木を受け取り、三人は2高の外に出た。

和之は、最後に美智代が門を降りると同時に苗木を腕に抱えたまま、門を背凭れにしてヘタリとその場に座り込んでしまった。

「疲れた……」

和之は、呟き深く息を吐いた。

「すごかったねえ、まさか本当にこんな事に出会っなんて」

疲れきっている、和之とは別に。

美智代は、感激に浸っていた。

しょっちゅう美智代に付き合わされて、
あちこち、心霊スポットに行っていたが。

あんな事を目の前で、目撃するのは今回が初めてだった。

だが、あのポルターガイストを見た時とは違い
気持ちが落ち着いた、今となっては
誰かのイタズラだったのではないかと、
言う気がしてならない。

しかし、苗木のあの豹変振りは
とても芸には見えなかった、
と言うか、苗木があんな事をして、
俺たちを、驚かそうなんて考えるはずもない
何より、一番今日ここへ来るのを拒んだのは
苗木だった。

和之は、両腕で抱えている、苗木の顔を覗き込む。
気を失った苗木は、顔色も先ほどより良くなり、
スヤスヤと寝息を立てていた。

「それじゃあ、もう一周しましょうか!？」

「・・・・・・・・」

和之は無邪気にそう言った、美智代をギロリと睨み付けた。

「怒らないでよ、冗談に決まってるでしょ・・・・・・・・」

美智代は、苦笑いをしていった。

「今日は、もうすごい物見られたし
何より、苗木が心配だしね」

美智代は、苗木の頬にやさしく触れる。

「さ、和之！苗木を家まで運んでもらうわよ！」

「それは良いんだけど、お前らを家まで送ったら
終電に間に合うかな・・・・・・・・」

和之は、苗木を背中に背負い直し
心配そうに、携帯を開いた。

時刻は夜22時を回っていた。

こちら辺に最終の電車が止まるのは、
23時30分のはず。

今からだと、一度2人の住む近くの駅まで電車で行き

家まで送ってから、もう一度駅に戻る頃には
ギリギリか、一足遅いくらいだろう。

しかし、いくら軽いとは言え、
苗木を美智代に、背負って送らせるのも
ない話しだしな。

和之は顔を顰める。

「大丈夫！もし乗れなかったら、
家に泊めてあげるから」

美智代さん、その言葉が思春期の男子にとって
どれだけ、重要な言葉かわかって使ってますか？

「そんな顔しないで、行くよ！
お父さん達に話して見れば
何とかなるだろうから」

そうですか・・・

和之は、さっきより
軽くなつた気持ちと
校門で引き上げたときより
重く感じる、苗木の体を背負い
美智代の後を追って行った。

僕と都市伝説 6

キンコンカーコン！

夕暮れの差し込む

静かな教室の中に、チャイムの音が鳴り響く。

教室には、三人の女子生徒が

中央の、机を囲むようにして

残っていた。

最近の連続して起きている、自殺事件の影響で

この2高では部活動が、一時活動休止になり

半強制的に、学校から出される感じになっていた。

だが、強制とは言ったが

学校が終わると同時に

教師に無理に摘み出される分けでもない。

どちらかといえば、学校が終わり

いつもやっている部活も無い、生徒達にとっては

大半が、学校に居てもやる事も無いので、

友達とゲームセンターやカラオケなどに

遊びに行ってしまう。

その為、先生方が摘み出す面倒も無く

大半の生徒が自分達から、学校と言う名の、檻の外へ出て行く。

多分、いやおそらく

今教師以外で、学校に残っているのは

この教室に今居る、3人だけであろう。

3人が囲んでいる、教室の真ん中に置かれた机の上には正方形の紙が横向きに置かれており。

紙には、0～9までのすうじが書かれていて

その他には、
はい　いいえ　YES　NO
あか　さた　な　順に書かれた五記音が記されていた。

「ねえ、倅……大丈夫かな？」

教室の窓側に立っていた、お下げの気の弱そうな

女子生徒は、自分から見て正面の

廊下側に立っている、同級生へ語りかけた。

語りかけられた、女生徒は

机に向けられていた顔を、ゆっくり上げると。

ずいぶん前に染めたのであろう

根元がもう黒くなり、毛先の方だけが

茶色に染まっている髪の毛を、

教室の外から差し込む、夕日の光により

一掃目立たせながら、「大丈夫よ」と

不気味な、笑みを浮かべた。

もう一人の、黒板側に立っている女子生徒は、

恐怖からか、俯いたまま顔を上げようとしないどころか
先ほどから、一向に微動だにしない。

浅羽幸に声を掛けた

幹原加味は、俯いたままの同級生

真部羽鋏に、声を掛けることは出来なかった。

つい先日、中庭で起こった自殺事件で亡くなった瀬上達子は、羽鋏の幼馴染であり、親友と呼べる存在だった。

あの日もいつもどおり、羽鋏は達子を誘い

一緒に中庭で昼食をとるはずだった。

しかし、あの日は朝から

達子の様子がおかしく、いつもは元気の良い達子が

今にも倒れそうと言う顔で登校してきた。

羽鋏は、そんな達子が心配で「気分が悪いなら早退したほうが良いよ」と

言っただが「大丈夫、大丈夫」と、笑顔で返されてしまう。

午前の授業が終わり「ねえ、今日も天気良いし、中庭でお昼にしようよ」と

一目散に、達子の席に向かって羽鋏が言ったが

「……ごめんね、私やっぱり体調が悪いから

保健室に行つて来るよ」と、達子は教室を出て行ってしまった。

あの時、自分が保健室まで着いていつてあげればと

羽鋏が後悔したのは、もう取り返しのつかなくなつてからだった。

達子を、教室の入口で見送つた羽鋏は

仕方ないので、その場で「今日は、私達と食べようよ」と

誘ってくれた、加味達の4人のグループに混ざつて昼食をとる事にした。

もともと、高校などの学校生活では自然と出来てしまう、女子学生の輪、グループなどには

入らず、誰とでも仲良くしていた羽鋏は、いつも一緒にお昼を食べ
ている

達子が休みの日などには、自然と色んなグループから誘われる事が
多かった。

「早くしないと、場所取られちゃうよ！」

加味の後ろから、グループの女の子が

羽鋏と幹原を、急かすように呼んだ。

「ちょっとまってよー！」と、声を響かせ

「瀬上さんも心配だけど、保健室行ったなら大丈夫だよ」と
加味は、羽鋏にやさしく言った。

達子が心配だったが、それもそうね、と

納得した、羽鋏は達子にそのまま着いて行く事にした。

そして、事件は起こる。

羽鋏は、中庭の端にある木陰で

加味のグループの子達と、楽しく昼食を食べていると、

一瞬何かが羽鋏の横を掠めるようにして、

空から何かが落ちてきた。

あの時の音は、今も羽鋏の耳の奥に残り

絶えずなり響く。そのたびに呼吸が苦しくなるくらい
胸を締め付けられる感覚に襲われる。

私の気持ちは、

怖い……

悲しい・・・
苦しい・・・

どれをとうしても、辛いに結びつくのだが
あれを見たときは、どれも違った。

ただ、目の前にある現実が信じられなかった
夢を見ているのか？。

もしそうだとしたら、

今頃私は布団の中で、大汗をかいている事だろう。

私の、真横で見たことも無い
いや、想像もしたことの無い姿で横たわっている、
親友がいた。

その後は、ほとんど記憶が無い。

先に悲鳴をあげたのは、自分では無いのはたしかだった。

確かその後直ぐに、学校側は生徒達を至急
家に帰したはずだ。

だが、帰り道自分はどういう気持ちだったか、
何を、考えていたか、何一つ記憶に残っていなかった。

そして気がついた時は、部屋で
泣いている私が居た。

しかし、あれから何日かが立ち、気持ちも少しは落ち着いたのだが、
未だに達子が自殺をする理由が
私には、まったく思い当たらなかった。

なにより今は、達子が飛び降りた先が、都合よく私の真横だったの
かが、

羽鋏は怖くて溜まらない。

もしかしたら、達子は私目掛けて落ちて来たのでは
ないのだろうか？

そう言う気がしてなかった。

私が何か達子に、知らない内に
気に触る事でもしてしまったのだろうか？

達子が、具合悪いのをほつといて

加味達のほうへ行ったのが悪かったのか？

あの日から、私が達子に悪い事をした
と、言う事ばかりを考えていた。

そして、そんな羽鋏を心配して

幹原は、今学校の女の子の間で流行っている

占い、狐狗狸さんを良くやっている

幸に頼んで、3人で狐狗狸さんに聞いてみる事にした。

羽鋏と加味は、狐狗狸さんを一度もやった事がない
というか、もともと2人は、占いなどをほとんど信じてはいなかつ
た。

しかし、遺書などが残されていなかったため
なくなってしまった達子の気持ちは、

今となつては、知る事が出来ない。

加味も、あの達子が保健室に向かった時

「保健室に行つたんだから大丈夫だよ」と

言つてしまった事に、多少の罪悪感を抱いていた。

その気持ちから、「自分のせいだ」と言つた、

羽鍬の言葉がなお更、加味を罪悪感と言う恐怖を強くさせた。

そんな心の重さに、耐えられなくなつた加味は、

幸が、良く狐狗狸さんの話をしていたのを思い出し

「もしかしたら、あの時の達子の気持ちが聞けるかもしれない」と
思い、それで今の状態から少しでも、心の癒しになつてくれるので
あればと

幸に占いを頼んでみた。

幸は、このことをすんなりとOKしてくれた。

むしろ、「死人の気持ちを聞こうなんて、面白そう!」と、まで
言つていた。

この時の、幸の言葉には一気に頭に血が上るのが分かるくらい
頭に着たが、それとおなじくらい、幸の無神経さにあきれてしまつ
た。

幸が、「それじゃあ、始めるわね」と言う、言葉とともに

スカートのポケットから、最近はやりのマスコットキャラクターの
刺繍が入った、財布を取り出し。

十円玉を、紙の中心へと置いた。

加味は、自分の足が振るえて居るのに気がついた。

この占いで、気持ちが落ち着くとは限らない
もしかしたら、もっと酷い事になるかもしれない。
もし、これで自分のせいだと言うことが起きたら
多分、今度は私が自殺してしなうかもしれない。

加味は、横目で羽鋏を見る。

羽鋏は、まだ俯いたままで居た。

幸は、紙の上に置いた十円玉の上に人差し指を乗せ
続いて加味も恐る恐るに乗せる。

そして、俯いたままだった羽鋏が
少しだけ顔を上げ、ゆつくりと2人と
同じように指を乗せた。

このとき、羽鋏の顔は見えなかったが
多分酷い顔をしていたに違いない。

この二日、羽鋏と学校で会っても
ほとんど顔を上げず、挨拶しても
反応がない状態だった。

「こつくりさん、こつくりさんおいでください」

始まった。

加味は、指先から羽鋏の振るえが伝わって来るのに、恐怖が一気に

高まり、
唇を強く噛みしめながら、（私達のせいじゃありませんように）
と、心の中で何度も繰り返して呟た。

静かな教室に、幸の狐狗狸さんと呼ぶ声が
反響して、呪文のように響く。

怖い・・・怖い・・・。

逃げたくて仕方なかった。

羽鍬の、すすり泣く声が聞こえてくる。

「こつくりさん、こつくりさん、おいでく・・・！」

来た！

倅の声が一瞬止まる。

こつくりさんが着てくれた。

だが・・・。

いつもと、違う事に倅は戸惑いを隠せなかった。

普通は、狐狗狸さんが着てくれたら質問をするのだが、
何も聞いていないのに、三人の指を乗せた十円玉は、
勝手に、動き出している。

それも、ものすごいスピードで、
同じ文字を何度も何度も。

「お」・・・「ま」・・・「え」・・・「の」
「せ」・・・「い」・・・「だ」。
「お」・・・「ま」・・・「え」・・・「の」
・・・「せ」・・・「い」・・・「だ」。

「いや~~~~!!!!」

羽鋏の、けたたましい悲鳴が
校内に響き渡る。

「だめよ！今手を離しちゃ」。

十円玉から、指を離そうとした

羽鋏の手を、幸は上から押せつける。

しかし、その手をねじるようにして

無理やり振りほどくと、急いで鞆を掴み

羽鋏は泣きながら教室を飛び出していつてしまった。

一方の加味はというと、

あまりの出来事に、腰が抜けてしまい

力無くその場に座りこんだ。

「あゝあ・・・羽鋏ちゃん呪われちゃうね」。

ただ一人、幸だけが何事も無かった感じに
そう言った。

聞いた事がある、こつくりさんを一度呼ぶと

「おかえりください」と言つて、こつくりさんに帰ってもらつまで
けて指を離してはいけない事を。

幸は、「まあ、仕方ないよね・・・私は忠告したし」と
さつき、羽鋏に捻られて赤くなつた腕を見ながら言つた。

幹原は、何も言えず座り込んでいた。

「こら！お前ら何をしているんだ！」

2人は、低い怒鳴り声に
羽鋏の出て行つた、扉を見る。

するとそこには、いつから居たのか
保健の先生の多織優兎が
怖い顔をして立っていた。

「今日はもうとつくに、下校していなきゃいけない時間はずだぞ！」

優兎は腕を組み、二人に怒鳴る。

「はゝい、すいません直ぐ帰りまゝす」

幸は、素っ気無く答えると
急ぎ机の、紙と十円玉を鞆にしまい、
2人は教室を出ようとした。

「あー、浅羽はちよつとまで！」

優兎の横を通りすぎると、すかさず

思い出したように倅を呼び止める。

「丁度良いから、お前には少し話がある……
保健室まで来い」

話とは何だろう？

加味は、倅を見ると、

幸は、さっきまでの余裕綽綽とした表情とは
違い、キツイ視線を優兎に送っていた。

「今日は疲れているので、また今度にしてもらえないでしょうか？」

「いいから、直ぐ終わるから来い」。

優兎に強く言われ、幸は疲れたように
ため息をつく。「じゃあまた明日」と

幹原に言い残して、優兎に着いて行ってしまう。

加味は、優兎が幸に話とは、もしかしたら

こつくりさんをやっていたのが、ばれたのではないのかと
心配になったが。

今はそれど頃では無い、

恐怖に、早く家に帰りたくて

2人が見えなくなるまで見送ると
そのまま帰ることにした。

「……」

幸は、優兎の背中を見ながら後を着いて行く。

話があるなんて嘘、今保健室に向っていない事も
そんな事は、分かりきっていた。

「それで・・・ちゃんと持ってきてるの」

「ああ、約束だからね」

それならいい・・・。

さっきの、教室での声とは別人のような
優兎の上ずった嬉しそうな声に、幸は吐き気がしそうだった。

幸も、無料で自分の大切な体を差し出すわけが無い。

ハイリスク、ハイリターン、それが

幸の中では当たり前だった。

それに、今は優兎の持ってくるものが
どうしても、今の自分には必要だ。

暗くなった外を見ながら、廊下を歩いていると
校門付近に人影があるのに気がつき、足を止める。

「・・・」

「どうかしのか?」

「・・・いえ、なんでもないです」

「そうか、じゃあ早く行くぞ」

はいはい……

そんなに焦らなくても、

存分に使わせてあげますよ

今この場に、ナイフがあつたら間違いなく

この男を刺し殺していた。

……だが、そんなことしたら

ハイリスク、ハイリターンが

ただの無駄なハイリスクだけになってしまふ。

幸は黙つて、優兎の背中を見ながら

また歩き出す。

今は、それよりも

気にかかつていた事があつた。

さつき、三人でコックリさんをしていたときのことだ。

あの時、最後に「おまえのせいだ」の「だ」の

文字の所で、十円を止めておいたはず。

なのに、しまう時にはなぜか

数字の6の所に十円があつた。

教室には、私達2人しかいなかった。

幹原はずっと腰を抜かしていたので、

動かせるはずも無い。

幸は、その事が気になってしかたなかった。
まさか、本当に呼べたのだろうか。

だとしたら、勢いで指を離してしまった
自分の身も危ない。

「・・・」

まあ、良いわ

今はとにかく、この獣を満足させて
私の獲物を手に入れなくっちゃ。

幸は、優兔に気づかれないようにして
薄笑いを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6999x/>

僕と都市伝説

2011年10月21日13時02分発行